

放課後

ふえすていぼる

番外編

あふたーふえすていぼる

表紙イラストにの子
山本沙姫

試し読み版

三次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『放課後ふえすていばる番外編 あふたーふえすていばる』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『放課後ふえすていばる メイドDE学園祭』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



放課後
心えすていばる

番外編

あふたー心えすていばる

山本沙姫

表紙／にの子

登場人物紹介

Characters

いしくろ こうた

石黒 幸太

琴沢学園でも有名なお人よし少年。

つきしま ほたる

月島 蛍

初音たちの後輩。コスプレが大好きで、自前の衣装を持っている。

くればやし はつね

紅林 初音

空手部に所属するスポーツ少女。女子生徒のなかでリーダー的存在。

みたらい きりか

御手洗 霧香

生徒会長の兄を持つ、わがままな資産家令嬢。フランス人クォーター。

あさひ な ももこ

朝日奈 桃子

初音たちのクラスをまとめる学級委員長。まじめで一生涯懸命な性格。

三日間にわたる一大イベント「琴沢祭」を終えたここ、私立琴沢学園は、夢と遊びの間から、元の味気ない学び舎に戻っていた。学園に続く長い並木道を、今日も多くの学生たちが、いつも通りに登校していく。

その中に、ひととき目立つ二人がいた。

「そんなに落ち込まないでよ、初音ちゃん。全国三位だなんて、すごいじゃない」

ガツクリと肩を落とし、トボトボと頼りない足取りで校門へ向かう少女を励ます、細身で色白な童顔少年。前日に見た空手の試合での彼女の活躍ぶりを、派手なアクションを織り交ぜながら必死に褒め称えるのは、お人よしな性格で全校に知られる石黒幸太である。

「……それ、去年の優勝者に言っても慰めにならないわよ。でも、ありがとう、こーちゃん」
 バラの花弁のように艶やかな唇でお礼を告げると、少女は普段の明るさを取り戻し、お人よし少年のか細い右腕にキュッとしがみついた。

長い黒髪をポニーテールに束ね、精悍な顔付きと、キリリと吊り上がった威圧的な黒き瞳が目を引く格闘娘。グレーのブレザーと短いスカートを纏った肉体には、鍛え抜かれた力強さと、女性らしい丸みを帯びた美しさを併せ持っている。

彼女の名は紅林初音。女子空手部次期主将の最有力候補だ。

「はっ、初音ちゃん……」

二の腕に当たる、マシユマロのように柔らかく、スイカのように大きな爆乳の感触にた

じろぐ純情少年と、彼を慕う凜々しき空手少女。二人は、幼稚園時代からの幼なじみである。思春期特有の気恥ずかしさのせいで心の距離が遠のいていたが、学園祭がきっかけで、身も心もグッと近づく事ができたのだった。

仲睦まじく登校する二人。だが、そこへ水を差す者があらわれる。

「おはよう石黒君。ウチも昨日、悲しい事あったんやでえ。慰めてえなあ」

不意に後ろから、春の日差しのようにポワポワとした関西弁が浴びせられたかと思うと、左手に一人の少女がしがみついていた。

地味な黒縁眼鏡を掛け、少し硬めの長い茶髪を三つ編みにした、ややポッチャリ気味のおっとり娘。あどけなさを残すふつくらとした頬と、レンズの下で弱々しく光るつぶらな瞳。色白、というよりは血の気がないといった感じの日に当たっていなさそうな白い肌が、初音と対照的な儂い美しさを醸し出す、守ってあげたくなるような女の子。

二人のクラスメートで、大阪出身の学級委員長、朝日奈桃子^{あさひなももこ}である。

元々、彼女は幸太とは言葉を交わすことすら少なく、ただ漠然といい人だと思う程度の存在としか意識していなかった。しかし、ふとした事から学園祭でやるメイド喫茶を二人で仕切るようになってから、彼への思いが変わっていったのである。

いつも笑顔で困難に立ち向かい、自分を支えてくれたお人よし少年に、いつしか身も心も吸いよせられてしまったのだ。

「ああっ、お、おはよう……桃子、ちゃん」

右手の幼なじみに引けをとらない、Dカップ寸前の巨乳を押しつけられて焦る幸太。朝から両手に花の彼に、活を入れるかの如き衝撃が襲いかかる。

「よっ、い、し、ぐ、ろっ！ 朝っぱらから修羅場ってるのかいっ!!」
パーンッ！

「いたっ！ ひ、ひどいよ、中里さん……」
なかざと

華奢な少年の背中を叩きながら話しかける、日焼けサロンで焼いた褐色の肌と、濃いメイクを施した顔が目立つ今風の遊び人ギャル。同級生の中里しのぶである。

彼女は学園祭でケガをしてまで頑張った幸太に好感は持っていても、恋愛の対象とは見ていない。ただ単に、彼をめぐる二人の友達との三角関係の行く末を見るのが楽しいだけで、時折茶々を入れてくるのだ。

「中里さん、そんなにいじめちゃあかなくて」

級長らしく、すかさず暴走する学友を窘める生真面目娘。だが、彼女は聞く耳持たない。「いーじゃん。それより朝日奈あつ、この前作り方教えてくれたサバの味噌煮、あれお父さんに好評だったよ。もつと色々教えて……」

「えっ、ち、ちよつと……そんなに引つ張らんといえな……」

人の話を聞かないマイペースギャルは、委員長の細い腕を掴むと、グイグイと引つ張っ

てさっさと幸太たちから離れていく。あまりの強引さに、桃子はおさげを振り乱しながら抗議するが、その表情はどこか嬉しそうだ。

(あの二人、すっかり仲良しになったなあ……)

学級委員長と問題児、相反する二人の楽しげなやり取りを見て、自然と幸太の顔もほころんでくる。

ついこの間までは、生真面目で成績優秀な桃子を毛嫌いしていた中里。学園祭の時も出し物の意見が対立し、険悪なムードになった事もあった。しかし、共にメイドをやった事がきっかけとなり、今ではよき友人同士だ。

おとなしい委員長を振り回しながら、喧しい遊び人ギャルが立ち去ると、入れ替わるかの如く、より一層五月蠅い娘があらわれる。

「幸太お兄ちゃ〜んっ!!」

「えっ! ぐあぁっつっ!」

遙か後方から、雛鳥のさえざりを髣髴とさせる甲高い声が響いたかと思うと、いきなり背中が重くなる。何者かが幸太の首に手をかけて、背後からぶら下がってきたのだ。

シャギー入りの短い茶髪に、クリクリとよく動く大きな瞳。ふっくらして、熟したリングを思わせる血色のいい頬に、低く丸みを帯びた鼻。わずかに膨らんだ控え目な胸とヒップが可愛らしい元氣娘。

幸太の一つ下の後輩で、小学生時代から付きあいのある妹のようなお隣さん、月島蛭だ。つきしまはたる 普段から彼の教室に出入りしている彼女は、違う学年ながらクラスのマスコットの存在である。また、趣味のコスプレの技術を活かして、メイド喫茶の成功に貢献した協力者でもあるのだ。

「もうっ、まーたボクを置いて一人で行っちゃうなんて、ひどいよお」

「くっ、苦しいよ……蛭ちゃん……」

顔を真っ赤にして、必死に抗議するお兄ちゃん先輩。小柄とはいえ人一人分の体重をかけて首を押さえつけられては、たまったものではない。

しかし、苦しむ彼に救いの手が差し伸べられる。

「まったく、いつも喧しいですわね。あなたたちは」

騒々しいクラスメートと後輩を窺めるように、一人の美少女が腰に両手を当てて少し足を開いた威圧的なポーズで話しかけてきた。

背は高からず低からず、胸の大きさもバスト八十に満たない中ぐらいのサイズながらも、大きくきれいに張り出したヒップが目を引く魅惑的なボディ。二本に束ねた長い髪は、フランス人の祖母から受け継いだ絹糸の如く滑らかな金髪で、晴天のように青く輝く瞳共々、上品な美しさを醸し出していた。生徒会役員にして名家の令嬢、御手洗霧香みたらいきりかである。

かつては、実の兄で生徒会長の伸一郎しんいちろうに対し、禁断の恋心を抱いていたクォーター令嬢。

しかし、学園祭準備中のトラブルで幸太の優しさと男性としての魅力に触れて以来、彼を慕うようになっているのである。

気丈で意地っ張りな性格故に、口に出す事はないが。

「あつ、霧香先輩。ちょうどよかった。お願いですう、今日の放課後、お買い物に付きあつてくれませんかあ？」

苦しむお兄ちゃんからパツと離れると、今度は目の前で睨みをきかせているお嬢様先輩に駆け寄り、腰に手を回して抱きついた。胸元に顔を埋めて、まるで母に何かをねだる駄々っ子のように、可憐な先輩のボディをユサユサと揺らす。

「なつ、なんでわたくしが？ はっ、放しなさいっ！」

教室によく出入りするとはいえ、虫は霧香と接する事はまるでなかった。だが、琴沢祭の前夜のハプニングがきっかけで、愛する殿方に尽くす方法を教えてもらえた事から、彼女を姉のように慕っているのである。

対する霧香は、いつも五月蠅く纏わりついてくる後輩を迷惑そうに突っぱねるのだが、鬱陶しく思いつつも、不思議と悪い気はしていなかった。人に慕われる事に慣れていない、不器用な感情のあらわれだ。

（御手洗さん、もっと素直になればいいのに……）

心の中で、そつと呟く幸太。

クラスの出し物に不許可が出なかった時や、メイド服が足りなくなった時、不機嫌そうな態度を見せながらも力を貸してくれた彼女。刺々しい態度の裏に隠された心根の優しさを、彼は見抜いているのだ。だがこの時、妹分の胸の内に燦る不満にまでは気付いていなかった。

学園祭期間に、兄妹のような仲から一步、進みきれなかった、という事を悔んでいるのに……。

「蛍ちゃん、まだ帰ってないのか？」

その日の夜、部活で遅くなった幸太が家に戻ると、お隣には人の気配がなかった。石黒、月島両家共に、ここ数日仕事で両親が不在なため、一人留守番をしている蛍の事を、彼はいつも以上に気にかけている。

しっかり者の霧香といっしょにいるはずなので、さほど心配する事はないと思いつつも、やはりかわいい妹分の動向が気にならないわけがない。色々と考えていたその時。

コンコンコン……。

何者かが、自室の窓ガラスを叩く軽い音が響く。こんな事をするのは一人しかいない。以前にも留守と見せかけて脅かしてきた、いたずら小娘だ。

「またか……蛍ちゃん。もう窓から来るのはだめだつて……わあっ！」

桃子。だが、同時に彼女は信じられない行動に出る。

カチャカチャッ!

青きお姫様は横たわる少年のズボンからベルトを引き抜き、ズボンを下着ごとずり下ろそうと手をかけた。

「えっ、ええっ、も、桃子……ちゃん？」

慌てて彼女を止めようと半身を起こし、華奢な手を伸ばす幸太。だが、そのか細い手首を、空手少女がしつかりと掴む。

「暴れてはいけません、ご主人様」

「わっ、は、放して……初音ちゃん！」

豪腕メイドに阻まれた彼は、なす術もなく下半身を曝け出されてしまう。拳銃娘の迫力に圧倒されて縮こまっていた一物が露になると、桃子は優しく両手で包み込む。

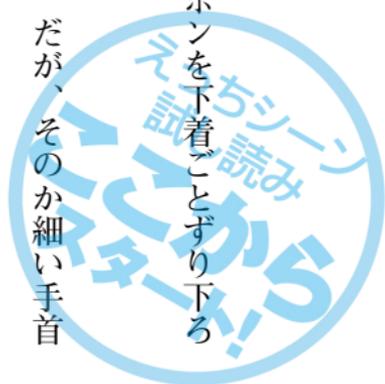
「あなたに、勇気と力を……」

シュツシュツシュツ。

白魚のようにしなやかな指が敏感な皮膚の上を滑り、先端の包皮を剥きながら根元から先端へ向けて繰り返し揉み抜く。

「はふうんっ……」

さらに続けて薄桃色の唇を開き、薄桃色に輝く亀頭を頬張った。己の急所に、生暖かい



粘液を纏った舌が、ネトネトと絡みついてくるのがわかる。

(こ、こんな時に……)

虫に対する後ろめたい気持ちと裏腹に、ジンジンと痺れるような心地よさが、下腹部から全身に広がっていき、抵抗する力を奪っていく。すると、この時を待っていたかのようにメイド少女も動き出した。身体を深く曲げて、ふくよかなバストで顔を押さえながら、横たわるご主人様のシャツのボタンをすべて外す。

そして、白い胸板を剥ぎだすと、薄紅色に輝く艶やかな唇で吸いついた。

「キ、キミまでそんな……はわあっ！」

「うんっ、くっんっんっ……ぶふうっっっ」

プチュップチュッ、チュルツチュチュッツツ!

胸元から臍の周りにかけて、敏感な柔肌の上を淫らな水音を立てながら這い回る唇と、桃色の乳首を甘噛みする真珠のような歯。同時に彼を襲う、目元に広がるプロプロと柔らかい感触と、谷間に埋まった鼻から入る乙女の甘酸っぱい体臭。

さらに、股間を責め立てる粘り気のある舌や唇に、純情少年は激しく興奮した。

「あっ、そ、そこ……ううっ……」

まるで、本物のお姫様とメイドに奉仕されているような錯覚に陥り、頭の中がぼやけていく横たわりし気弱少年。男の筋人に次々と熱き血液が送り込まれ、みるみるうちに膨張

していく。

小さな薄桃色のミミズが、鎌首をもたげる、赤黒き大蛇へと変貌していくように。

「うんっ、くはぁあつっつ！」

ムリヨツ！

並外れた巨根が天を突く勢いで立ち上がり、大きく開いた先割れから漏れる先走り汁と、コスプレ少女の唾液でヌラヌラと煌めいた。

「ふうっ……さあ、月島さん。あなたの番ですよ」

口から粘液の糸を引きながら呼びかけてくるお姫様先輩に應えるように、バニー少女は横たわる少年の細い腰を跨いで立つ。そして赤き股布を摘み、クイツと右へずらした。

「あっ……」

甘酸っぱい淫蜜の香りを振り撒きながら、悩ましい仕草を見せる可憐な妹分に、思わず息を飲む幸太。薄茶色の控え目な若芝に覆われた乙女の丘は、すでに真ん中を走るクレヴアスから溢れ出る蜜で湿り、淫靡な輝きを放っていた。

目の前でいきり立つ、愛しきお兄ちゃんを求めて。

「ほら、幸太お兄ちゃん。ボク、お兄ちゃんの事思うと、よく、こんなになっちゃうんだよお……もう、我慢できないよお。」

サツと腰を前に突き出して、自ら熱く蠢く秘唇を見せつける蛭。陰毛を伝わって、愛蜜

の雫がポタリと落ちた。

「ほっ、蛭ちゃん……」

戸惑う彼の腰の上にしやがみ込むウサ耳少女。ピクピクと震える未熟な入り口に、真つ赤に膨れ上がった亀頭の先端があてがわれた。

「まっ、待って……」

幼い身体を気遣い、慌てて止めようとするお人よしのお兄ちゃん。だが、彼への愛を貫きたい、恋する乙女は止まらない。紅葉のような手で彼の脇腹を押さえ、動きを封じつつ腰を下ろす。

「はふっ、ふっ、ふうつつつ……ひいっ!」

クチュツ!!

小さな秘唇が押し広げられ、裂けるような鋭い痛みがピツと瞬間的に走り、一瞬顔をしかめる蛭。しかし、怯まずに少しづつ膝を曲げ、さらに深く啜えた一物を飲み込もうとする。「んぐっ、あっ、あうんつつ……」

メリメリと、湿った肉同士が擦れる音を響かせながら、少しづつ少女の中へ挿入されていく、熱き松明。あまりに太いそれは、小柄な少女には荷が重すぎだ。

しかし、彼女は愛しき人より深く結ばれたい一心で、力の限り送り込む。

「うっ、あんっ、はああうつつつ」

フリル付の短いスカートがまくれ上がり、興奮のあまり薄紅色に染まる太股と、大きく張り出した桃尻が顔を覗かせる。

「み、御手洗……さん!? はうああつつつ……」

毛穴から淫蜜が染み込み、骨まで溶かしてしまいそうな熱さに覆われていくような錯覚に、幸太は襲われる。湿った金髪が、柔らかな肌をシヤクシヤクと擦る感触もこそばゆく、そして気持ちがいい。

「あんっ、霧香せんぱいもおっ、ボ、ボクだつてへえんっ！」

「ごしゅちんさまあんっ、あつ、あたしのを……」

「はぷうんっ、き、きもちひいですかあ、幸太さまはあんっ」

新たなるライバルの出現に、各々より自分へ彼の気を引こうと、さらに激しいご奉仕テクニクを繰り出す。

「んんっ、ちゅぴっ、んっんっはうんっつ……」

ティアラを落とし、長い茶髪を振り乱しながら、愛しき少年の身体を嘗め回す桃子。胸元や腹部ばかりでなく、飛び跳ねるウサギ剣士の隙を突くように、器用に背中を丸めて内股にまで潜り込んでくる。そして陰囊に吸いつき、下腹部を覆う繁みに舌を絡めた。

「そっ、そんなに吸われたら……オレ……」

竿と同時に囊まで責められて、股間の痺れがますます強まる幸太は、開いた両足がこむ

ら返りを起こしそうなくらいピンと張って、ビクビクと痙攣する。

「ふうっ、はっ、はっ、こっ、幸太さまぁん」

ジイイイーツツツ!

あまりに激しい動きに耐えられず、無理やり閉めていたドレスのファスナーが悲鳴を上げた。露になった白くならかな背中が薄っすらと汗ばみ、激しく波打つ。

「あうん、ごっ、ご主人さまぁ……」

プチッ……!!

初音の豊満な肉体を収めていたメイド服も、激しい動きについでいけずボタンが引きちぎれ、きつく押さえ込んでいた爆乳が勢いよく飛び出す。硬く勃起した薄紅色の小さな乳首が目の前でフラフラと揺れ、時折鼻先を突いた。

「ううっ、は、初音……の、匂い、はふうっ」

同時に、胸の谷間を流れる玉の汗が、雫となってご主人様の頬にポタポタと垂れ落ち、湧き立つ乙女の体臭で鼻腔を擦る。

「ど、どお……幸太、お兄ちゃあはあんっ! ボ、ボクが一番、気持ちいいよねえんっ!」
先輩たちに負けないぐらい艶やかな喘ぎ声を張り上げながら、虫もますますヒートアップしていく。

ブシユクツブシユクツ……。

最早繋がった秘所から痛みが完全に引き、溶けてしまいそうなほどの熱さとジンジン痺れるような快感しか伝わらなくなってきたウサギ娘は、もう歯止めが利かない。上下に飛び跳ねながら、小さな尻を円を描くように捻り、啞え込んだ一物を振り回す。

「すっ、すごいよ、こんなに……んんっ……」

急所を根元から引き抜かれそうならぬ衝撃と、ヌルヌル絡みついてくるゼリーのうな肉壁の感触に興奮し、喘ぐ幸太。男根だけでなく、心までもが少女の中へ飲み込まれて行く気がした。

長きに渡り続いてきた、お人よし少年とコスプレ娘たちが織り成す、淫欲のフェスティバル。噎せ返りそうなほど部屋の中にたちこめる、若き娘たちの甘酸っぱい愛液と汗の匂いに包まれる中で、いよいよフィナーレの時間が近づいてきた。

「ああっ、も、もう……でっ、でるう……」

顎をしゃくり上げて、うわ言のように呟く幸太。下腹部を尿意に似たビリビリと痺れる感覚が襲い、射精の時間が近いのを悟る。

「こっ、幸太お兄ちゃんっ、ぶるぶるしてる……ボクのお腹……ひっ、ひいんっ！」

膣内で小刻みに震える、愛しきお兄ちゃんの一物に感激する蛭。彼女にも、刻々と受精の瞬間が迫っているのがわかるのだ。

ブシュン、ジュブンジュブンツツツ！

小さな身体を大きくくねらせて、ラストスパートをかける彼女に釣られるように、周りの先輩たちの動きも、一斉に激しくなる。

「はあんっ、いつ、石黒……くうんっ……はぁあんっ！」

腕に跨がる黒衣のお嬢様は、いつもの気高さからは想像つかないほどのはしたない声を上げながら、腰を前後に素早くスライドさせる。溢れ出る熱き蜜が泡立ち、パチパチと弾ける刺激が、か細い腕を覆っていく。

「こっ、幸太さまあっ、も、もうわたし、我慢……できな、いつ……」

「あっ、あたしもですう、ご主人さまぁ……」

愛するお人よし少年の肉体に奉仕しつつ、彼の喘ぎ声に興奮するメイドとお嬢様。秘唇の疼きに耐えきれず、空いた手を下着の中へ滑り込ませ、みずから陰裂を広げ、中を弄りはじめる。

薄布が吸いきれないほど大量の恥蜜が、二つの泉からタラタラと溢れ、赤いカーペットに淫らな地図を描いていく。

五人の心が一つになって、快樂の峰を登っていった。そしてついに、限界が訪れる。

「あっ、あうんっ、こ、幸太様ぁ……わたし、もう……らっ、らめえっ！」

「ごっ、ご主人様あん、あっ、あたしも……イッ、イッ、イッちやううっ……」

「あひいつ、わっ、わらくしも、もう……イッ、イクウッ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>